

# 映画「星に語りて～Starry Sky～」上映会

きょうされん40周年記念映画 松本 <sup>ゆるぐ</sup> 動 監督作品

字幕あり

NPO法人ハートネット西尾は、精神障害の理解をとおして、障害者や市民の誰もが安心して暮らせるまちづくりを目指しています。これまでに映画会や講演会などの企画をしてきました。今回は、映画上映会を行います。あわせて、ポッチャの体験交流や市内福祉事業所の紹介ブースを設けます。特に今回の映画は、2011年東日本大震災で起こった事実の物語です。それは明日私たちの身に起こることかもしれません。多くの方に見ていただき、考えるきっかけとなればと願います。

2022年11月19日(土)13時30分から(13時受付開始)

予告動画はこちらから

会 場：西尾市文化会館大ホール(西尾市山下町泡原30)

その他：「ポッチャ」体験交流会

●車いすを使用の方もご覧いただけます●

入場無料



◆新型コロナウイルス感染防止に関するお願い◆

- ◎必ずマスクの着用をお願いします。
- ◎発熱や咳など体調の悪い方の来場はお断りします。
- ◎会場入り口で手指消毒を行います。  
ご協力をよろしくお願いします。

西尾駅から会場まではこちら

当日ご来場いただいた方には、  
先着順で福祉施設の自主製品をプレゼント!



主 催：西尾市

後 援：愛知県西尾保健所・西尾市教育委員会・西尾市社会福祉協議会  
西尾市医師会

企画運営：NPO法人ハートネット西尾

問 合 先：NPO法人ハートネット西尾事務局 0563-54-5237

(就活センター えん 内)

## 物語のあらすじ

舞台の一つは、岩手県陸前高田市。高台にある共同作業所「あおぎり」では、津波の直接的な被害は免れたものの、仲間の一人を失って落胆する利用者たちを女性所長が励ましなが、一日も早く障害のある人が日常を取り戻せるように一步を踏み出そうとしていた。また全国障害者ネットワークでは、東京、秋田、岩手、福岡など全国のグループが連携して支援活動を始めようとしていた。そんな矢先、「障害者が消えた」という情報が入ってきた。多くの避難所をまわっても、障害のある人の姿がほとんど見当たらないというのだ。

一方、福島第一原子力発電所事故によって避難を余儀なくされた地域の一つ、南相馬市では、避難できずに取り残されている障害のある人の存在を知った共同作業所「クロスロードハウス」の代表らが、自らの手で調査に踏み切ろうとしていた。しかし、各地の障害のある人の安否確認を進める中で、彼らに立ちはだかる障壁があった。それは、個人情報保護法によって開示されない、障害のある人の情報だった。法律によって守られる人権と、一刻を争う人命救助との狭間で苦しむ支援者たち。前項障害者ネットワークでは、この障壁を打ち破る手立てを模索していた。

## 監督からのメッセージ

私が強く願うことは、この映画を障害福祉へ関心の無い人たちにこそ、ぜひ観てもらいたいという思いです。

私はこの映画に携わるまでは、恥ずかしながら、自分もその一人でした。もちろん、障害のある人を軽視していたつもりはありませんが、被災した障害のある人たちが、こんな状況下に置かれていたなど、知る由もありませんでした。それはきっと、知らず知らずの内に障害のある人たちの存在を、忘れていたのだと思います。

普段、障害のある人と接点が無い人たちは、きっと私と同じでしょう。ですから、そんな人たちがこの映画を観て実情を知ってくれば、きっと障害のある人たちの存在を意識し、関心を持ってくれるはずですよ。

人は、いつ障害を持つかわかりません。それは病気や事故によるものかもしれませんが、健康である人も、歳を取ると共に何かしらの障害がある人になり得るのですが、それに気づいていない人たちが大勢いるのです。

この映画は、過去の東日本大震災を描きながら、すべての人にいずれ訪れる、未来の有り様をも描いています。私はこの「星に語りて～Starry Sky～」を、一人でも多くの人に観てもらい、その真実を知っていただきたいのです。

## 試写をご覧になった方の感想

「障害者が消えた」ってどういうことだろう？

最初、残念ながら逃げ遅れた方たちが多かったんだくらいにしか思わず、その言葉に潜む背景、困難、不条理さなど意味の深さも分かっていないまま映画を鑑賞しました。そして、映画を観終わった後、その言葉の本当の意味と悲しさを知りました。

避難者は健常者ばかりではないことは当然なのに、通常の避難所は、障害者とその家族は過ごすことが困難な場所だということ。未曾有の大震災という誰もが被災者という中では、身体、知的、精神、視覚、聴覚障害など様々なその障害特性がいっそう奇異な目で見られ、それぞれが生きるために必要な事であってもわがままと疎んじられて、避難した先でさえ居場所をなくし、迷惑がかかるからと自ら半壊状態の自宅に戻って、救援物資が届かない中で我慢していたという事実。

障害者がいない、そんな状況に気づき、全国から集まった支援者が安否確認を行いながら支援しようにも、行政にある障害者の情報が個人情報保護を理由に開示されないという不条理さ。

東海地震はいつ発生してもおかしくないとされています。この経験を生かし、わが町が被災する前にできることは？被災した時にどうあるべきか？障害者とその家族、福祉関係者、行政関係者だけの話ではありません。市民の誰もがこの映画を通じ、学び、考えるきっかけになる、そんな映画だと思います。

Kさん

映画を観て障害者の本質的な強さを感じました。災害時の混乱状況の中、障害者にとって避難場所がとても生活しにくい環境であるのに、そんな状況でも障害者が活躍できる場もあることを映画から得ることができました。障害特性を理解し、苦手なことではなく得意なことを伸ばしていくことが今後の社会で必要なことだと感じました。

 Instagram



Sさん